
the four seasons

月城レイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

t h e f o u r s e a s o n s

【Nコード】

N 9 6 1 2 S

【作者名】

月城レイ

【あらすじ】

新たな春を迎え、コナン、蘭、哀、三者の関係が動き出す。
変わらず、新一を待ち続ける蘭、罪悪感からどんどん追い詰められていく哀、二人の間でコナンの心は揺れ動く。

spring

春。絶望の季節。偽りの姿の彼は今どんな気持ちでいるのだろうか。

少しばかりの安堵と重い罪悪感に苛まれる春。貴方は何を思うの。

春。焦燥と絶望の季節。組織との決着をつけることなくめぐる季節。

偽りの姿の俺を置いてまわりは駆け足で過ぎていく。今彼女はどんな気持ちでいるのだろうか。

春。期待と絶望の季節。彼の帰還を待ち望む季節。

今度こそと期待していても幻のように彼は現れない。今彼は何を思っているのだろうか。

「哀君、本当に一人で大丈夫かね」

「ええ、心配しないで博士。子供じゃないんだから大丈夫よ」

心配性の保護者を安心させるため哀は軽く肩をすくめて見せた。

「しっかり、戸締りはしとくんじゃよ」

「……まったく、心配性なんだから」

なおも後ろ髪引かれる様子の博士を見送り、哀はソファーに身を沈めた。季節の変わり目のせいか数日前から風邪をひき、自宅療養を強いられているのだった。

「不摂生がたたるなんて…もう年かしら」

冗談めかして呟いてみるが、気分は晴れない。進捗しない解毒剤の開発に焦燥が募り、連日徹夜をしたのがいけなかったのだろう。

急がば回れとはよく言ったものだ。

「熱が下がらないことにはどうしようもないわね」
気分を無理やり抑え込み哀は目を閉じた。

「哀ちゃん、今日も学校に来なかったね」

「こじらせていないか心配ですね」

「うな重食わせとけば大丈夫だぜ」

「元太君」

——灰原の奴また一人で抱え込んでるんじゃないだろうな。

コナンは足を進めつつ少年探偵団の会話は聞くとともにしに聞きながら考えに耽るという器用なことをしていた。

——なんでたよんねえんだよ。たくつ。

数日前から元気がないのには気がついていたが、下手に声をかけるとなんでもないわと言われて終ってしまいそうで、放っておいたことが悔やまれる。

「もうっ、コナン君てば！」

「えっ」

耳元で歩美に叫ばれあわてて顔を向ける。

「聞いてなかったの？ もう。哀ちゃんのお見舞いみんなで行こうよ」

「あっああ」

かくして少年探偵団の4人は一路博士の家を目指したのだった。

ピンポン。待つこと一分。

「出ないね、哀ちゃん」

「寝てるんじゃないでしょうか」

「せっかく、来てやったのにタイミングわりいぞ」

「病人なんだからしゃーねーだろ。いいから、おめえらもう帰れ。後で様子見て連絡してやるから」

弱っているだろう相手のことを思い、不満げな子供たちを帰らせようとする。

「えーコナン君ばかりずるい」

「そうですよ、不公平です」

「内緒でうな重食べる気か」

「ちげーよ。治りかけは移りやすいっていうだろ」

その後も粘ろうとする三人を振り切りコナンは一端毛利家に行くふりをして入口から阿笠宅へと侵入した。

「……灰原？」

博士は学会が何かだろうか。しんと静まりきった部屋に居心地の悪さを感じコナンは忍び足で中の様子をうかがった。

「……おねえちゃん」

ソファで苦しそうに呼吸をする哀を見つけコナンはあわてて近寄った。

額に手を置くとものすごい熱であった。

「くそっ」

桶と水と氷を取りにリビングに向かい、すぐに取って返す。タオルを水につけ絞り額にそつと置くと冷たいのか哀は身じろぎをした。「こんなになるまで我慢するか、ふっ」。少しぐらい甘えたらどうなんだよ」

なんでも抱え込もうとする灰原に、言いようの無いいらだちを感じ、つい意識がない相手に文句を言ってしまう。それでも、ぬるくなるたびに額のタオルを変えるあたり、「豆である」。

「……」

熱に浮かされ白い肌がい色づく様子をいつの間にかまじまじと見

てしまい、コナンは固まった。

—— えっ、俺何みとれてんの？相手は灰原だぜ。目をそらせ、俺一人赤面してしまいます増す動きが取れなくなるコナン。

「……ごめ……なさい」

苦しそうな寝言に我に返り、思わず灰原のほほに手を伸ばす。

「夢の中まで、謝るな。バロー」

どこまでも自分を責め続ける少女が、痛々しくてコナンは目が覚め、熱が冷めるまでずっと付き添ったのだった。

s p r i n g (後書き)

コナンの哀に対する意識が変化していく様子を描けたらと思います。
5話程度で完結する見込みです。

s p r i n g s i d e 哀（前書き）

この小説は一部新蘭を含みますが、基本的にはコ哀です。苦手な方はb a c kして下さい。

spring side 哀

笑顔。優しくて温かな顔。

皮肉の裏返しなんかじゃなくて、素直な気持ちで笑いかけたら貴方は笑い返してくれるかしら。

辛くて切なくてもちよっぴり優しい夢を見ていたような気がした。

目を覚ますと目の前には、江戸川コナンの顔があった。

「……ちよつと、顔が近いわよ」

素直について居てくれてありがとうと言えるはずもなく、温くなつたタオルを額から退かしながら起き上がる。

「おめえって、黙ってれば結構綺麗だったんだな」

「あら、それは皮肉かしら」

唐突な物言いに思わずドキリとしたことなどおくびにも出さずに言い返す。

「ちげーよ、素直な感想？」

いいながら首をかしげるコナンに思わずジト目を向ける。

「たまには素直にありがとうって言えねえのかよ」

「あら、寝顔を覗き込んでいたマナー違反の人に言われたくないわね」

後ろめたい自覚があったのか江戸川君はうつとたじろいた。

クスリと笑って付け足した。

「ただどありがとう」

「……ああ。あんまりこんつめんなよ」

他にもなにか言いたそうにしつつも江戸川君は私を気遣うように

言った。

こういったさりげない優しさは困る。どういつ反応を返していいかわからないから。

「……もうそろそろ帰りなさい」

結果帰宅を促してしまふ。本当はまだ一緒に居たいような居てほしくないような不思議な心地だったのだけれど。

「ああ。一人で大丈夫か」

「ええ。遅くまでごめんなさい」

今日は博士が帰ってこないことを見越してか、少し心配そうな様子の江戸川君に頷きを返す。

夕闇のなかを歩くコナンを見送り私は心の中でそつと呟いた。

——ありがとう、工藤くん

江戸川コナン。工藤新一の仮の姿。最近彼の事をよく考える。彼と居ると落ち着かないような、逆にとても落ち着くような不思議な気持ちになるから。

だけど、いくら考えてもなぜそんな気持ちになるのか今はまだ解らなかった。

探偵事務所の机を拭きながらふとコナン君の帰りが遅いなと思った。すると、タイミング良く事務所の階段をかげ上がってくる足音がした。

「ただいま蘭姉ちゃん」

「おかえりなさいコナン君、遅かったわね」

「うん、ちよつと博士の家に寄つてたんだ」

話を聞くとどうやら哀ちゃんが風邪をひいて寝込んでいるらしい。心配だが、コナン君が気にかけているなら大丈夫だろう。小学生とは思えないほどしっかりしているのだから。

「手を洗ってきて、すぐに御飯よ」

「はい」

元気良く返事をするコナンに微笑ましい気持ちになる。

ふとあまり愛想がいいとは言えない哀のことが頭をよぎる。嫌われてはいないようだが、なんだか避けられているような気がして、なんとなく彼女のことが苦手だった。

自分とは違いコナンと哀の中の良い様子を見ているとこの頃何とも言えない感情に襲われるようになったことも苦手意識を持つ原因となっていた。

——いつか、仲良くなれるといいな。

思いつつもなかなかきっかけがつかめなかったりするのだ。小学生相手に苦手意識を持つ自分に苦笑しつつ、御飯の準備を思い出し、慌てて台所へと向かった。

s p r i n g s i d e 哀（後書き）

誤字脱字等の気がつかれましたらご一報いただけるとありがたいです。

s u m m e r 前編(前書き)

大変遅くなりましたが、s p r i n g続編です。
次回は間隔があかないように気をつけます。

summer 前編

夏。困惑の季節。偽りの姿のまま過ごす彼は何を感じているのだろうか。

私は何を考えているのだろう。仮初の時間であってもきっと貴方は喜ぶのだろう。

夏。解放の季節。偽りの姿を諦観と少しの安堵を持って受け入れる季節。

彼女は今幸せだろうか。

夏。喜びの季節。たとえ一時でも彼は姿を現してくれるだろう。今すぐには帰ってこれなくてもずっと待ってる。

阿笠邸の地下室に籠っていた哀は出来上がった薬を前にして深く息をついた。

恐らく限りなく完成に近づいたであろう解毒薬の存在を知れば、間違いなく工藤新一は服用を望むだろう。待たせている彼女を少しでも安心させるために。それが仮初にすぎないとしても。

なぜか重くなる気分を振り払い、哀は二日ぶりに階段を上がり博士に顔を見せにいく。

「……哀君っ。全くご飯も食べずに何をしとったのじゃ」

「ごめんなさい、どうしてもやりたい事があって」

「何をそんなに思いつめているんじゃない」

「なんでもないの。どうしてもきりがよいところまでやってしまいたくて」

心配そうに顔を曇らせる阿笠に申し訳なさを感じつつも哀は言いようのない気持ちを悟られないようごまかしてしまう。

「……体には気を使いなさい、女の子なんじゃから」

「わかったわ」

鈍く痛む頭を振り哀は頷いた。

「キャンプ？」

「そう！ 園子に誘われて。せっかくだし新一も行こうよ」

「……」

江戸川コナンの姿で行くわけにもいかず返答に詰まってしまった新一を知ってか知らずか、蘭は何度も一緒に行こうと促す。

行きたくないわけではない。むしろ行けるものなら行きたいのだ。寂しい思いをさせている彼女のために。しかし、そのために解毒剤を灰原に催促するのは気が進まなかった。そのようなことをすれば、きつと彼女は自分を責めるだろうことがなんとなくわかってしまう。

「ごめん蘭。やっぱり俺……」

「新一が忙しいのはわかってる。だからこれたら来て。じゃあね」

断られまいと新一の言葉を途中で遮り言うだけ言って蘭は電話を切った。

断ったら新一はきつと来ない。だったら、来るかもしれないと期待する余地ぐらい残してくれた方がいいではないかと蘭は思う。

「待ってるのは、すぐじゃなくてもきつと会えるって信じてるからだよ新一」

もう聞こえていない携帯に向かって蘭はそっとつぶやいた。

「哀ちゃんおいしかったねシチュー」

一人離れた所に座っている哀の隣に歩美は腰掛けた。

「料理上手なのね、歩美ちゃん。どっかの誰かさんと違って」

ヘックション。博士と話していたコナンは突然のくしゃみに離れた所に入る少女たちの方を見た。灰原と視線が合いクスリと笑われ思わずジト目を向けてしまう。

気にした風もなく灰原は歩美に視線を戻した。

「歩美たまにお母さんのこと手伝うからシチューは得意なの」

「そう、偉いのね」

えへへと歩美は照れ笑いをする。しつかり者の哀ちゃんに褒められるのはとても嬉しいことなのだ。

「でも残念だったね、光彦君と元太君がキャンプに来られなくて」

「小嶋君はともかく円谷君が夏風邪をひくなんてね」

夏風邪は馬鹿がひくって言うのにねと哀は肩を竦めて見せた。

「今度はみんなで来ようね哀ちゃん」

「ええ」

今度はないかもしれないと思いつつも哀は頷いた。

「それでね、あのね……キャンプ場のお兄さんがさっき言ってたの。

この時期にしか咲かない花が山の近くの崖付近に咲いてるって……」

「もしかして、お土産かしら」

「駄目かな？」

「二人とも喜ぶと思うわよ」

一緒に見に行きましようかと哀に誘われ二つ返事で歩美は頷いた。

「ないわね」

「どこかなあ」

暗くなり始めた山道は危険である。元々夕飯を食べた時間がそこまで早くなかったことを思い出し哀は後悔した。

いくら日の長い季節とはいえ、子供の足ではそんなに早く歩くこ

とが出来ないことを迂闊にも失念していた。

「ごめんね哀ちゃん。なんだか哀ちゃんこのごろ元気がなかったから、綺麗なお花を見たら元気になるかなって……」

涙ぐみ訴える歩美に哀ははっとした。

——こんな小さな子にまで心配かけて何やってるのかしら私。

思わず自責の念に駆られかけるが、そんな場合ではないと哀は気を引き締めた。

「ありがとう歩美ちゃん。ごめんなさい、心配をかけてしまったみたいで」

「うつん、いいの謝らないで」

歩美はこの綺麗な同級生が好きだった。自分の知らないことを知っていて、大人にも顔負けの度胸とミステリアスな雰囲気懂れている。だから、彼女に悲しい顔はさせたくなかった。

「コナン君と何かあったの哀ちゃん」

「江戸川君？……何もないわよ？ どうして？」

——嘘だ。

根拠もなく反射的に歩美はそう思った。

「歩美、言ってくれないとわからないよ哀ちゃん」

コナン君だったらわかるのだろうか。ふとそんなことを思う。

二人は否定するだろうけれど、歩美からすると二人は特別なのだ。どこがどうとは説明できないけれど、強いて言えば雰囲気だろうか。誰も入り込めないような特別な空気の時があるのだ二人には。

「……歩美ちゃん」

本当のことは言えない。けれど、小さなこの少女には嘘はつきたくない。

私は嘘で塗り固められている。ひたむきな瞳と向き合い哀は罪悪感に胸が痛んだ。

コナンは、夕食後、何も言わずになくなった二人に気が気ではなかった。灰原が付いている以上めったなことは起こるまいと思いつつ、急速に傾く日に心配は募る。

きつと、様子を見に行けば、「子供の貴方に心配されるなんてね」などど皮肉を言われるのが落ちだとわかつてはいても落ち着かず、コナンはテントの近くをうろろろしていた。

「のう、新一君。哀君と歩美君が散歩に行ったようだが、大丈夫かのう」

心配性の博士に声をかけられ、コナンははつと顔を上げた。

「わりい博士。何もねえとは思うけど、見た目は小さな女の子二人だし、暗い道を歩かせるのも心配だから迎えに行ってくるわ」

言いながら、走り出した新一に「気をつけてな」と阿笠は声をかけた。

なんで言い訳がましく弁解したんだろうと内心首をかしげつつ、

コナンは暗くなり始めた道を急いだ。

「やべえな、早く見つけないと」

道中二人の足跡を見つけたものの、道を見失ったのか二人の足跡は途中で途切れており、草むらに分け入ったような痕跡を発見し、後を追いかけていた。

——くそつ、さつきから胸騒ぎがおさまらねえ。

荒くなる息と共に気持ちばかりが焦る。落ち着けと言い聞かせながらコナンは先を急いだ。

「危ないっ!」

珍しい灰原の切羽詰まった声に瞬間息が詰まる。

「哀ちゃん——!」

——届け——。

コナンは落ちていく小さな姿に必死に手を伸ばす。スローモーション

ンのようにゆつくりと灰原の姿が宙に踊る。

伸ばされた手に、ふっと哀は微笑んだ。

「灰原——っ」

掴めなかった手が虚しく投げ出され、絶叫が崖に反響した。

summer 中編

「灰原、灰原、灰原っ、哀ーっ」
考える。思考を止めるな。

「ごめんね、コナン君、歩美のせいで」
崖下へと姿を消した少女を思い歩美は号泣した。

——哀ちゃん、無事でいて。

取り乱す歩美を気にかける余裕もなく、コナンは必死に思考を研ぎ澄ませようとする。

絶壁というわけではなく、取っ掛かりは有るものの子どもの体では登ることも下することも不可能だった。

「歩美ちゃん博士と大人たちを呼んできてくれ、早く！」

躊躇う歩美を叱咤し、走り出したのを確認する間も惜しんで、コナンはサスペンダーを近くの木にくくりつけた。

引っ張って強度を確認するや否や躊躇なく、バンドを伝って飛び降りる。

無数の擦り傷が出来るのにも構わず、哀の姿を探し求めひたすら下っていく。

少し開けた場所に倒れた少女の姿を見つけ、コナンは手を使って勢いを殺し哀の元に飛び降りた。

「哀っ哀ーっ」

頭から血を流しピクリともしない様子にコナンは血が凍りそうになった。

揺することも出来ず、ひたすら意識のない相手に呼び掛ける。

——嘘だろ、冗談キツいぜ灰原。早く目開けろよ。喉が裂けんばかりにコナンは叫び続けた。

誰かに呼ばれている気がした。けれど、目を覚ますのがけだるくてまどろみを享受する。ちよっぴりうらやましいような笑顔の歩美を夢に見る。

『江戸川君のせいじゃないのよ……ただ私には果たすべき義務があるの』

『義務？』

『そう、ずっと果たさなくちゃって焦っていたのに、今になって気が重くなるなんてどうかしてるわ』

『哀ちゃんの気が進まないならやらなくていいのに』

『そういうわけにはいかないわ。私の責任だもの』

難しいことを言われて良くわからなかったのか、歩美は顔を曇らせた。そんな顔をしてほしくなくてふと苦笑して見せると、歩美はまっすぐに自分を見つめてきた。

『哀ちゃんにとってコナン君て何？』

歩美の意図するところはわからないものの正直に答えることにした。

『共有者。誰にも言えない秘密の共有者よ』

『そっか』

正直に答えていることが伝わったのか歩美はよかったと、輝かばかりの笑顔になった。

このまま、目覚めたくない。だけど、目覚めなくては。まだ、自分にはやるべきことが残っているのだから。

「……名前で呼ぶなんて馴れ馴れしいわよ、工藤くん」

呻き声をあげ灰原は身を起こそうとしたが、全身が鉛のように重くピクリとも動かせなかった。このままでいれば、助からないことがなんとなく自覚できた。

「……バ一口、早く目を覚ましやがれ。どんだけ呼んだと思ってんだ」

瞳を潤ませるコナンの姿に、泣いてるのと一瞬からかいたく思うもそんな余裕はなく、直ぐに思考を切り替える。

「聞きなさい工藤君」

「灰原？」

静かな声に嫌な予感でも覚えたのかコナンは表情を厳しくする。それには構わず、灰原は必要なことを淡々と伝える。

「……私の服の中にA P T Xの最終試作品が入ってるわ。完成品に限りなく近いはず……。これと博士の家に隠してあるデータを組み合わせれば……完成させることができ……るはず」

本来ならば、この最終薬を飲ませて服用を繰り返してしまったコナンの体の反応を見て微調整するはずだったが、もう時間がない。途切れそうになる言葉を哀は必死に気力で繋ぎとめた。

「なに……言ってんだよ灰原！」

「最後まで付き合えなく……てごめんなさい……貴方が幸せになれるよう祈ってるわ」

力なく閉じられた瞳にコナンは絶叫した。

「哀……！」

「ぜってー認めないからな、おめえが死ぬなんて。おれが死なせない」

乱暴に灰原の服を探り見つけた薬を躊躇いなく飲み込みコナンは呻いた。いつもの比ではない、心臓がはじけ飛びそうな痛み喉から絶叫がほとばしった。

summer 後編

「新一君!？」

「救急車は」

「すぐそこじゃ」

阿笠は本来いる筈のない青年の姿に酷く驚いた。尋常ではない汗をかいた新一の腕の中にそっと抱えられた少女に気が付き、慌てて救急車が止まっている方を指す。

新一は人だかりに構わず真っ直ぐ救急車に近づいた。

「通してくれ急患だ」

叫びに人だかりが割れ、救急隊員がタンカを運び出した。

「新一!？」

「蘭……」

救急車の音を聴いて駆けつけてきたのか、人だかりの中に幼馴染みの毛利蘭がいた。

「崖から落ちて全身を強打してます。意識は一度戻りましたが、現在混濁中です。急いでください」

構わず隊員に口早に告げ一緒に乗り込もうとする新一に、蘭は切羽詰まった声をあげた。

「行かないで新一い」

自分でも滅茶苦茶だと思いつつも今を逃したらもう会えない気がして蘭は必死に引き留めようとした。

「わりい後で必ず会いに来るから」

背中越しに声をかけ新一は一度も振り返らず、いなくなってしまうた。

「……どうしてなの」

どうしていつも自分を置いていくのか、自分ではなく哀と居るのか、振り返ってすくれないのか。蘭には何一つ分からなかった。

携帯のコール音に蘭ははっと目を覚ました。

気がつかないうちにテーブルで突っ伏して眠ってしまっていたらしい。

新一の文字に慌てて携帯に飛び付く。

「もしもし新一！今どこにいるの？」

「……ああ、蘭。今お前んちの前だよ」

新一の言葉が終わる前に、蘭は家を飛び出した。

「わりい来るのが遅くなつて」

「本当だよ心配したんだからっ」

涙を浮かべて駆け寄ってきた蘭に新一は胸が痛んだ。三日ぶりに会った蘭は憔悴しきっていた。

「一緒に居てやれなくてごめんな。事件がいつ片がつくかわかんなくてさ」

それでも本当の事は言えず、偽りを告げる。

「会いに来てくれたの？」

キャンプ場まで自分に会いに来てくれてたまたま哀に遭遇したのだろうか？

自分の言葉に違和感を覚えつつもそうであればいいと蘭は思った。

「ああ」

——嘘。新一は嘘が下手くそだ。

それでも信じるしかないと思ふ。最後には必ず新一が帰ってきてくれるのなら。

「ちよつと公園に行かないか？」

ずっと辺りをうかがうようにしていた新一の言葉に蘭は頷いて一緒に歩き出した。

街灯に照らされた公園にたどり着くと蘭は思いきって切り出した。

「新一。新一は私のことどう思ってるの？」

「蘭は俺の大切な……」

守ってやりたい女の子だよと言おうとしてふと新一の脳裏に血塗れの少女が浮かんだ。目の前でムザムザ怪我をさせてしまった、ただ一人の運命共同体が。今だ意識が戻らず病院にいる灰原に心がきしむ。

今目の前でほほを染めている蘭も、一人孤独に生きる灰原哀もどちらも守ってやりたいと思う。

「新一？」

黙り込んでしまった新一に訝しげに蘭が声をかける。

「大切な……幼馴染みで守ってやりたいやつだよ」

新一の言葉に勇気付けられ蘭は思いきって告げた。

「なら私とキスして？」

震えながら見上げてくる蘭を可愛いと思うし、答えてやりたい。

だけど決着を着けるまで、中途半端なことはできないと新一は拳を握りしめた。

このまま灰原が意識を取り戻さなければ元の姿に戻ることにすら出来ないかもしれないのだから。

「今はまだ無理だ。ごめんな蘭。たけど、全部終わったら必ずちゃんとするから」

「新一い」

応えてくれない幼馴染みを恨めしく思い蘭は取りすがった。

けれど、新一は決して手を出すことはなかった。ただ、蘭が泣き止むまでずっと傍について居たのだった。

a u t u m n 前編

秋。まどろみの季節。変わらない関係に安堵と罪悪感を覚える。
今貴方は何処にいるの。

秋。感情の季節。いろんな色の感情があふれ出る。
今彼女は何を思っているのだろうか。

秋。待望の季節。もうすぐ彼は帰ってくる。
私のもとへ何をおいても。

カーテンを閉め切った病室に青白い顔をした少女を見つめる二人がいた。一人は感情を殺した様な表情で、もう一人は悲しげなそれでいて怒ったような表情をしていた。

一定の音を刻む機械音を聞きながら背の高い男が口を開いた。

「本当にいいのかボウヤいや探偵君」《detective》

「もちろん。それに俺がいないと困るでしょ、赤井さん」

まだ小学生くらいの男の子が年に似合わぬ苦笑を浮かべた。――

――江戸川コナンである。

コナンは三月がたつても一向に意識を取り戻さない灰原を待ち続けていた。

彼女が眠り続けている間にコナンを取り巻く環境は激変していた。日に日に思いつめたような顔をするが多くなった幼馴染の少女。哀が意識を取り戻さないことを悔やみ続け、今にも死にそうな顔をした歩美。そして、死んだとされていた元組織の一員にしてFBIの精鋭赤井秀一。

引き絞られた弦のように、何時ぶつりと切れてもおかしくない感情の線をコナンは自ら断ち切ろうとしていた。

「本音を言えば、君には組織突入に欠けて欲しくはないがね。意識のない彼女を一人にしておくのは心もとない」

赤井はコナンと哀の両者の真実の姿を知る唯一人だった。万が一組織の人間に突入を嗅ぎつけられた場合、組織の裏切り者であるシエリーが処分される可能性は捨てきれない。だが、FBIの護衛をつければ、何かあると言っているようなものである。必然、彼女は無防備な状態におかれることになる。

「組織と決着をつけなきゃどのみち先はないよ。一人でも俺は行く。」

——逃げんなよ灰原」

ゆるぎない瞳で見上げるコナンに赤井も決意を固めた。何があってもこの少年と彼女が無事に生きられるように守ることを。

最後に少女の姿を目に焼き付けると、二人は明日にむけてやるべきことをするべく病室を後にした。

もう何度同じように携帯をとっただろうか。だけど、決して感情は同一ではなかった。

「もしもし」

「蘭か……俺だ」

固い声に瞬時によくない話だと悟った蘭はわざと明るい声を出した。

「もっと電話かけてきてよ、新一。色々話したいことがあるんだよ。あのね……」

「ごめん、いつも無理させて」

労わるような声に蘭は思わず泣きそうになった。

——新一に心配をかけちゃいけない。健気に明るくまってるないと。うっん。大丈夫」

「ありがとな」

無理をしているのが分かりながらそう言うことしか新一には出来なかった。もうこれ以上無為に待たせることのないように今告げなくてはいけない。そう思いつつもなかなか切り出せなかった。

「新一どうしたの」

無言になった事をいぶかしみ蘭が呼びかける。

「もしも、俺が一週間たつてもお前の所に戻って来なかったら、俺のことはもう待たないでくれ」

新一は思い切って切り出した。

「えっ、ちよつとどういうこと何かあったの」

「今までありがとな蘭、本当にお前はいいやつだよ」

皆まで言わせず、新一は感謝の気持ちを伝えようと唐突に携帯を切った。

蘭は茫然と切れた携帯を見つめ次いで涙をこぼした。

締め切られた薄暗い部屋の中、白いベッドに横たえられた少女の手がピクリと動いた。病床の少女——灰原哀は夢を見ていた。

「どうしたの工藤君、そんなに悲しそうな顔をして」

愛しの彼女に何かあったのだろうかそんなことを考えながら声をかけると驚いたように振り返った。

「灰原！？ どうしてここに？ いやこれは夢なのか」

わけのわからない事を言う青年に薬の副作用でどうにかなってしまっただのかと心配になる。

「身体の調子でも悪いの？ 博士じゃ微調整が難しいものね。ごめんなさい、最後まで見届けられなくて」

死んでも夢を見るものなのかとそんなことが頭をよぎるが、もしかしたらまだ、崖から落ちた直後で生死の境を彷徨っているのかも気にしないことにした。

「馬鹿、縁起でもないこと言ってんじゃねえ、お前はまだ死んでないぞ。さっさと目を覚ましやがれ。俺はお前以外に身体を見てもらう気はないからな」

「ずうずうしいわね貴方。いいじゃない元の姿に戻れたようだし、もう私がいなくても」

心配してくれてうれしいと思うが、素直になれず憎まれ口を叩いてしまう。けれども、確かにもう疲れてこのまま眠っていたいというのも正直な気持ちだ。

「好い加減諦めろ灰原。俺はお前が幸せになるまで絶対にお前の命を諦めないからな。覚悟しとけ」

私の気持ちに構わず、言いたいことだけ言って工藤君は遠ざかっていくとしていた。

「待って……」

彼は驚いたようにこちらを振り向いた。

「私は生きてもいいのかしら」

ずっと不安だった。数え切れないほどの命を奪っておきながら、私がこの世でのうのうと生きていていいのかと。もう工藤君を元の姿に戻すという理由もないのだ。

「お前が生きててくれないと俺が困る」

嘘でも嬉しかった。もう少しだけがんばってみようと哀は思った。

「ぼうずっ、ぼうずっ、ぼうず！　気がついたか」

呻きながら身を起こしたコナンに赤井は安堵のため息をついた。

「俺、意識を失ってたんですか」

「ああ、ざっと10分くらいな。こんな状況で寝られるなんて頼もしいな」

ニヤリと笑みを浮かべるが、赤井の顔は濃い疲労に彩られていた。励ますようにコナンは声をかけた。

「夢で灰原に会いましたよ。いつもと違って素直に心配してくれて可愛かった。……最初だけだけど」

「勝利の女神がおいでになったか。ならさっさと片をつけようじゃないか。愛しい恋人と^{宿敵}」

痛む身体を押してコナンは銃を担いだ赤井に続いて、銃声の飛び交う通路へと身を翻した。

それから半日後ボロボロの体でコナンは灰原と再会を果たした。

「……灰原！？」

扉を開けた先の光景に目を見開いたコナンは半信半疑で呼びかけた。ゆっくりとこちらを向く少女の顔は痩せぎすではあったが、た

しかに自分の知る灰原哀であつた。慌てて駆け寄ると灰原は顔をしかめた。

「相変わらず、そうぞうしいのね」

コナンの様子に大事な場面に間に合わなかったことを悟り灰原は長く目覚めなかったことを後悔した。長く昏睡状態だっただろう為に力の入らない身体と元の姿に戻っていないコナンから大体何があったのかを素早く推察し、目を伏せる。

——何の役にも立てなかったなんて、何のための命よ。

「また、そうやって自分を責める。おめえいい加減その後ろ向きな考え方直せよな」

ぞんざいな口調ながら温かいものを感じ、知らず灰原の瞳からしずくがこぼれおちた。途端コナンが焦った顔をする。

「悪かった。俺が悪かった。な、だから泣くな」

泣いてないわよと口を開こうとした瞬間大きな音を立てて灰原の大切な人が入ってきた。

「哀君——。良かった目を覚ましたのじゃなあつ。わしは、わしは」

気を利かせて病院の人が連絡を入れてくれたのか、阿笠が泣きながら駆けつける。

「なぜ、泣いておるのじゃ。新一君？」

「俺のせい？ ですよね」

怒りに顔をゆがませる博士の迫力に思わず新一はタジタジになった。

二人のやりとりに灰原は目を丸くし、次いで泣きながら微笑んだ。その表情に言い合いをやめ、コナンと阿笠はしばし見入った。

「ありがとう、工藤君。博士」

素直な気持ちで灰原は二人に感謝を告げた。

組織との決着をつけてから、そして、灰原が目覚めてから一ヶ月後、新一は約束した公園で蘭を待っていた。すぐさま蘭に会いに行きたかったが、解毒剤が手に入るのに時間がかかる事と、万が一を懸念して電話を一本入れたきり今日まで彼女と会うことはなかった。連日報道された謎の組織のニュースはようやく落ち着きを取り戻し、懸念は晴れ後は思いを伝えるだけである。というのに、新一は気が重かった。

駆けてくる蘭の姿が視界に入り新一は気合を入れた。

「おまたせ、新一」

「ああ、久しぶり蘭」

久方ぶりに見る彼の姿に蘭の心は舞い上がっていた。遂に待ち続けていた瞬間がやってきたのだ。なんと夢に見ただろう。

紅葉した紅葉のように蘭の頬も上気していた。

「蘭……」

祈るように胸の前で両手を組む蘭の姿に新一は言葉に詰まった。それでもこのままの関係でいる気がない以上一歩を踏み出さなくてはならないのだ。

「蘭……俺さ——」

手に汗を握り新一は思いの丈を蘭にぶつけた。

「はっ何言ってるの新一冗談でしょ」

新一の言葉に蘭は耳を疑った。けれど、馬鹿みたいに新一は真剣だった。

「俺さ、傍に居て支えてやりたい奴が出来たんだ。放っておくと独りでいようとしまうんだそいつ」

少し悲しげに微笑む新一に蘭は驚いた。自分が知る新一はいつも自信満々で、決して今みたいに大人びた笑みを浮かべるような少年ではなかった。

「俺はあいつが誰にも気兼ねなく笑えるようになって、幸せを受け入れられるようになって欲しい。傍にいてやりてえんだ」

言わないで欲しい。それ以上、聞かせないでほしい。そう思うのに新一は、目をそらさずまっすぐに見つめて来る。蘭は心の中で悲鳴を上げていた。

——私を見て。新一。気がついてよ。聞きたくないんだよ、そんなこと。

「だけど……そうしたら蘭の事をいつも一番に考えてやることはできねえから。はじめをつけようと思ったんだ」

「そんな簡単に決めないでよ！ 私何にも知らなかった！ もっと私の事も考えてよ。ずっと、待ってたんだよ……それなのにどうして、別の人の話をするの？ 意味がわからないよ新一」

堪え切れずに蘭は叫びながら新一に訴えた。きつと、一生懸命伝えれば、わかってくれるはずだ。だって自分はずっと彼と一緒にだったんだから。これからも一緒にいられるはずだ。

怖くて怖くて、蘭は取り乱し新一にすがった。けれど、新一は蘭を抱きしめることなく、ごめんなと呟いた。

「蘭——お前のことが大好きだ。——だけど、俺が愛している

のは、宮野志保なんだ」

「新一いー」

「ごめん、俺はもう選んじまった。だから、お前とは幼馴染以外になることは出来ない」

きつぱりと突き離され蘭は茫然と新一を見上げた。一筋の涙がほほを伝う。

――許さない、許さないんだから。

新一が背を向けても、蘭は日が沈むまでじっと微動だにせず地面を睨みつけていた。

「ここは貴方の家じゃないんだけど」

連日顔を出す高校生探偵に呆れ思わず灰原は声をかけてしまった。

「やつと口きいてくれたな。何怒ってたんだよ」

新一が元の姿に戻って早二ヶ月、季節はもうすぐ飽きが終わり冬になるうとする時分、灰原はなぜか新一を避けるようなそぶりを見せていた。

「こんなところに顔を出している暇があつたら彼女のところに行きなさいよ」

新一と蘭がその後どうなったかは知らない。が、上手くいったのだろうと思うと何だか新一に声がかげづらくなった。そんなことが言えるはずもなく哀は話題をそらした。

「なあ、灰原。お前は元の姿に戻らないのか」

人の話を聞きなさいよと睨みつけるが、思いのほか真剣な新一の顔に押し黙る。

「俺は宮野に会いたいよ」

不安に揺れる瞳に気がつけば新一はそう口走っていた。迷うように顔を伏せる灰原に思わず手を伸ばしてしまう。ビクツと揺れる身体を抱きしめなくなる。

「話して工藤君」

触れられた箇所が熱く、弱弱い声しか出せない自分に哀は苛つた。

触れられたくない。触れたくない。一人でいたい。これ以上思い知らせないで。

感情が悲鳴を上げ手を振りほどこうとした瞬間、新一の渴いた声が耳朵を撃った。

「おめえが好きだ」

馬鹿言わないでと叫びそうになった哀は新一と目が合い硬直した。

——そんな目で見ないで。私はっ。

「哀——」

新一の制止を無視して哀は駆け出した。扉を乱暴に開け離し、行き先も考えずにただ我武者羅に走った。

学校帰り園子は親友の毛利蘭とカフェに向かって歩いていた。何故か最近塞ぎがちな蘭に何とか元気になってもらおうと園子から誘ったのだった。

——愛しの旦那新一君が帰って来たのどうしたのかしら。

園子には思い当たる節がなかった。よって、美味しいものを食べればどうにかなるという信条の元、お気に入りのカフェで精一杯奢って元気になってもらう心づもりだった。

「——あの子、そうだあの子だっ」

「蘭どうしたの」

突如声を張り上げた蘭にぎょつとし、物思いからさめ、視線の先へと首をめぐらすと取り乱した様子の少女がいた。

「確かガキンチョのガールフレンドの……」

何時も冷静な少女の普通じゃない様子に園子は心配になった。

「あの子のせいだったんだっ」

ずっと、新一に別れを告げられたあの日から何がいけなかったのか考えていた。やっとわかった、いけなかったのは宮野志保という女とこの少女だ。灰原哀。なぜなら、血まみれの少女を運んでいた新一は様子がおかしかった。私じゃなくてあの子のことを見てただから――。

「やめて、蘭。止めなさい。蘭――！」

園子の悲鳴じみた声にぼんやりとしていた蘭は我に返った。目の前にはほほを晴らした哀の姿があった。割れるように頭が痛くまたたきもせずじつと見つめていると哀が身じろいだ。

「あそこです、いきなり少女に飛びかかってっ」

「やだ、あれ蘭ちゃんじゃない」

「まさかあ」

群衆の声に「早く行って」と哀は焦って蘭を促した。

動こうとしない蘭にしびれを切らし、厳しい顔をした園子に声をかける。

「蘭さんを連れて行って頂戴」

「何言ってるのよ」

殴られたにも関わらず平然とした灰原の様子に、ひるみつつも園子は首を振った。

「私のことはいいから、早くしないと蘭さんが補導されちゃうわ」

「必ず、後で行くから」

警官が呼ばれかけて来る様子に園子は蘭を引きずる勢いで駆け出した。

「私がいけないのよ。これは当然の罰だから。貴方が気に病む必要なんてないの」

蘭に聞こえないと知りつつも灰原は吐き出すように言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9612s/>

the four seasons

2011年6月19日17時40分発行